



Title	保健・医療の国際協力
Author(s)	中園, 直樹
Citation	大阪公衆衛生. 1994, 66, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83790
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

わが国の保健・医療分野の国際協力を考えてみると、国内の在日外国人の受療のシステムの未整備など身近な問題も山積している。ここでは、特に開発途上国との関わりで、わが国が途上国の保健衛生上の諸問題に何ができるであろうか、

を考える上で、保健・医学・医療の教育に携わる者（公衆衛生学）として国際協力上の問題点を述べさせて戴きたい。

筆者は大学院の4年の時、西アフリカのセネガルのパストール研究所滞在時

回転扉

に約2ヵ月、その後学会の度に、タイのバンコック、フィリピンのマニラのいづれもスラムの保健所で保健所活動の1週間研修に参加したことがある。

昨年からはフィリピンのネグロス島への医療奉仕に参加しているが、これまでの偏った私

体験から意見をのべさせていただき、皆様と一緒に考えていきたい。

途上国も経済発展が進むにつれて、一部では成人病、公害病、事故、薬物依存などの疾病も増え疾病の二重構造を示しはじめたところもあるが、まだ

保健・医療の国際協力

関西医科大学教授（公衆衛生学）

中園直樹



まだ高頻度の疾病は、予防接種の普及、安全な飲料水の確保、栄養改良、居住周辺の環境改善などで予防が可能な疾患である。それには社会的基盤としての保健教育の普及が必要である。それと民族の存亡と宗教に深く関わりがあるだけに大問題である人口問題に対処する家族計画と母子衛生である。プライマリヘルスケアそのものである。

プライマリヘルスケアのプロジェクトを計画するには、住民活動や医療の実態調査など草の根レベルの調査が必要で、途上国でプライマリヘルスケアの推進にプロジェクト計画に参画し、指導もできる能力の専門家とその実行をサポートする専門的技能集団がいる。現地での医療・公衆衛生分野の現地専門家と共に活動あるいは指導できる能力を持つ医療・公衆衛生学専門家をわれわれは育て上げ、輩出させなければ

ならない。この人は現地に比較的長期滞在できる人でなければならない。私の様に、すぐ帰って来るようではいけない。セネガルでのコルネット博士の様に10年ジャングルに住み着けとは言わないが…。

振り返ってみると改善されつつあるが、わが国には語学の教育に、また職場では長期滞在に不向きな制度がまだまだ残っている。医学・医療教育上では欧米留学・高度先進医療の修得ばかりに眼を奪われ勝ちである。

途上国の現地の風土、文化、国民性に学ぶことの多い保健・医療協力にどしどし出かけて行き、責任と義務を立派に果たすことの出来る公衆衛生の専門家を一人でも多く育てることができれば本望である。culture「文化」とは cultivate「育成する」ということである。